

総長就業と廃業

長岡半太郎

本誌（『文藝春秋』一九三六年）の二月号に、来間君は總長論を面白く書かれ、毀誉褒貶得意の筆を揮われ、過去数年間の大
学歴史を批判された。予の如き非才も其中に織り込まれ、過分の御褒めに預り、誠に赤面の至りである。予は
もとより總長に祭り上げらるる器で無いと、自ら信じて疑わなかつたから、大阪に赴任せよと内談があつたと
きは頗る躊躇した。又之を棄るにも何の遲疑することはなかつた。寧ろ豫定の行動を執つたので、自分とし
ては是位欣幸な覚は無い。他大学の学長や總長も、それぞれ理由があつて、居坐りになるのも廃業するもの
あろうから、予の場合と全然趣を異にするであらう。實際大学の仕事に従事してみれば、如何様にも考えら
るる下地がある。あながち居坐りで無能を公表するばかりの醜態に止まるまい。若し予の心底を描かしめば
次の通りである。

来間君の書かれた来歴は、大部分間違ないとして、予が阪大理学部の建設を了るまでの心持ちは、昔話の鷺
に掴った亀の如くであつた。亀は沼沢の間に尾を曳き、そこらあたりの虫や細魚を喰つて楽しんでゐる。一旦
鷺の爪に捕われて、空中高く青空を凌ぐ辺まで上り、下界を眺むれば、見慣れた芦の叢や藻屑は、視界より
消え失せ、山や川、木立ちの茂つた処や、都市の街衢を見るばかりで、眼は眩み、恐怖の念に打たれ、若しや
鷺が爪を弛めたらば、岩に碎かれ粉微塵、然らざれば市街に落ちて、児童の玩具となつて身を終る。どうしよ

う、こうしようかの心配のみで、頭を甲螺こうらにすくめていているばかり、恨めしいこと限り無い。鷺に掴まったのは運の盡き、身を処する方便に窮し、また元の沼に帰りたいは千万である。之と同様、總長のような職掌は、予には不向きである。研究所(理化学研究所)に帰るは、世間から見れば亀が淤泥おでい(どろどろの水たまり)の中で尾を曳くと同様であるかも知らぬが、樂は実に其処そこに存する。それが予の本望であると、最初より覚悟したのである。即ち總長を引受ける間際には、如何にして古巢に戻り、依然研究に従事し得るか、確と判断してからの事であつた。而して鷺掴わしづかみを最初は押し除けたが、遂に掴まってしまった身売りの幕と、冲天に登ってどんなものを目撃したか、来間君が書かれなかつた事情を、聊か補遺として本誌の数頁を瀆けがさざるを得ないのである。

X

読者は、何故に總長がそんなに嫌いかと問わるるであろう。是には一片の苦い経験があるからだ。今より約二十八年前の出来事である。時の専門学務局長福原鏝二郎君が予の実験室に来た。其頃室は極めて手狭であつたから、予は致方いたしかたなく、廊下に卓を構えて仕事をしていた。福原君は其状態を見て、こんなに窮屈な所に居なければならぬのかと驚きながら、今日は重大使命を帯びて来た。今度仙台に東北大学を新設するにつき、教授となるべき人の任選を依頼したい。是非引受けてくれとの要事であつた。幸に其時講師に本多光太郎(一八七〇—一九五四年。物理学者。磁)、大学院を出て間も無い日下部四郎太(一八七五—一九二四年。地球物理学者。一九二一年東北帝国大学理科物理学教授に就任)の如き逸才がいたから、立談の間に物理方面の人は決まつた。其他化学、数学、地質等の候補者も旬日を出でず豫選を終つた。總長には澤柳政太郎(一八六五—一九二七年。貴族院議員。大正自由主義教育運動の一環として成城学園を創立。一九二一年東北帝国大学初代総長、一九二三年京都帝国大学第五代総長を歴任)と特定してあつたが、理学部の部長を誰にするかの問題となり、澤柳も文部省側も予に之を擬した。予は環境を考え、東北大学の設備と豫算をも提示されたので、行く気になつて、留学生を派遣することやら器械購入等にも力を盡し

た。又開校前に一度歐洲を巡廻すべしとのことで、或る国際會議（万国電氣工芸委員會、輻射）に出席するを名義として、半年餘（一九二〇年七月―一九二一年一月）諸大學を觀覽して、大に益するところがあつた。歸朝していざ開學準備に着手せんとするや否や、濱尾（濱尾新、一八四九―一九二五年。貴族院議員。文部大臣。一九〇五年第八代東京帝國大學總長就任）東大總長に呼び付けられ、不心得を懇々談じ込まれた。其理由はここに記す必要は無いが、簡單明瞭、田舎に行かず、腰を落ちつけて東大に留まれとの話であつた。先生の癖は、誰も記憶しているが、脇腹を摩さするとか何か違つた徑路を辿つて、同じ意味の議論をする。決して議論風発と評すべき卓説を吐くのでは無い。然しかし長たらしく、聴く者は欠伸あくびを催すを禁じ得ない。最初の説論には、先生五回ばかり脇腹を摩さつた。十日ばかり後で、復また呼び出されたから、畏かしこつて聴けば前回と殆ど同一句調であつた。無論之に応ずるも同一であつた。熟々つらつら考うるに、先生は説論の文言をノートに認めただらう。今後何回呼ばれても、恐らく同一の話に違いない。そうなると双方の氣根較べだ。此方も之で当れと、遂ついに冀度胸を据えた。又其時、ナポレオンの訓戒を思い出した。「汝等同一の敵と屢々しばしば戦なか勿なれ、度数を重ぬれば汝の戰略は見透かされるぞ」と、濱尾先生に対するも危言危行は止めるがよい。一度話したことは間違ひ無く、ノートを読むよむ如ごとく繰り返すが得策だ。無駄な事を言うてしくじるなと思つた。それから呼出さるる毎に、先生の脇腹を摩さする度に、返事をすること前と毫も渝あらざるようにし、諄々として説かるれば、亦之にあんずること諄々として諭示には屈服しなかつた。實際先生の話は、脇腹を摩さする毎に、少しく路を異にして旋風の循環すること、恰あたもサイクロンのようである。之に對して、こちらはアンチサイクロンを決め込んで、十數回も應對を重ねた。いくら持久戦を覚悟していても、遂ついに勘忍囊の緒が断きれそうになつて来た。

つくづく考えて見ると、濱尾總長は、名望教育界をおさしてゐる。文部省の役人は其職に留まること數年にして去る。總長と予とは意見が隔絶してゐる。もしも強して東北大學に行つて、其為ためにならぬことが出來いすれば、

責任は逃れ難い。此の如き事件が、起るとも、起らぬとも期すべからず。澤柳氏に対して、總長は何の文句も無いから、予は黒幕に隠るるが上策であろうと決した。そこで總長に呼び付けられて屈服するのはまずい。行懸り上自ら進んで思い止まったと言うが、機宜に適していると考え、總長に接して、東北行きは止めましたと言ったところが、總長は満悦。判ったか、判ったかと言われて、事件は終に落著した。予は其席で、總長の真摯には白旗を掲げましたと、真意を吐露した。其後予は廊下の一隅に帰り、竊に思つた。總長たるもまた難いかな。一人の教授が転任するとして、十数回もよび出し、其の度毎に一時間餘も説明せねばならぬか、總長などには、未来永劫決してなるものではないぞと、人知れず歎息した。其後十数年を経て、予は外遊中パリの新聞で、濱尾先生の訃は、遊戯の火傷で薨去されたと記してあつた。先生は正しく真摯の火で歿せらるべきであつたのに、遊戯の火とは何ぞやと訝つた。又数年前、東大に先生の銅像が建つた。之につき学生等が押し問答をした挙句、あの頭は中空か、それとも実があるかと議論終結せぬ内、二人の学生は像に攀じ上つて、拳で打診を行い、空だ空だと叫んだそうだ。是は像の拵え方の問答で、別に深い意味は無いが、中空でも、確に元は真摯な脳味噌が充滿していた。只之に「ひだ」が多かつたか少かつたかは疑問である。敢てここに議すべきではない。

×

濱尾總長の旋風式説論を拜聴した人は、恐らく開成学校を通過した人に多からう。人の性質は容易に変らぬから、帝大時代になつて、予の如き論告を受け、其真摯に辟易した人あることは確である。然し是は当面の問題には関係せぬから、ここに之を記するを止め、予は阪大入りを為す前創立運動を起した大阪人の考えを、揣摩臆断してスケッチするに、試みに濱尾流の口吻を学び、読者に運動真相を紹介したい。固より旋風式の動

機であるから、読者は其冗長を厭わるるかも知らぬが、前提として之を記述することを許されんことを希う。

昭和五(三〇九)年六七月の頃、大阪市民の間に、大阪風ならざる運動が開始された。申すまでもなく、大阪に帝大がないのは、地方の大なる缺陷であるから、其創立を図ろうと云うのであった。五十餘年前、予が大阪英語学校専門学校等に在学した頃には、大阪人の学生を見ること、全く土芥の如く、袴を佩いて町を通れば、書生はんが来やはると、丸で齒に懸らぬ無愛憎な挨拶振りで、学問する奴ほど馬鹿な者は世の中に無いと言わぬばかり、反つて前垂れを締めて歩けば、幅がきいて、市民は批評を加えなかつた。實際商業学校が開けたころには、学生も此様子にあきれ果て、袴を書物と一緒に包みて出校し、学校に入りてから着替えたと言えられてゐるも好一对である。当時の大阪人の氣風は、てんで学問などに耳を傾けなかつた。是は可なり古い話であるが、明治四十二(〇九)年頃になつて、大阪医学校を医科大学に昇格してはどうかと、牧野文部大臣が市民に図つたところが、遂に応諾しなかつたそうだ。之から推すと、大正の始めまでは、市民の多くは、学問のありがた味が判明せず、単に朝起きて相場の変動を見、夜は算盤を枕にして眠り、金儲けの夢を結ぶ位が、其欲望の概略を示すものであつたらう。今日に至りても、其旧慣を脱しない人が大分あるに相違ないが、近年大阪に這入り込んだ他国人の所措を考えて見れば、大学創立運動の開始されたのは無理もない。

由来大阪は関西第一の貿易港であるから、昔も今も変わらず、民衆輻輳の巷であり、又其散乱地でもある。従つて他国人と相接すること頻繁であり、他国人も亦能く大阪人を知つていた。徳川時代に脱藩して、大阪に流浪した学者はあつたが、之に氣を留むる大阪人は、寥々晨星(夜明けの星)の如く、反つて京都が儒者の本拠となつたことは、歴然としてゐる。其故学問の根柢を大阪に樹つるは困難であるのみならず、市民が学問のありがた味を感じぬと来ては、袖手傍觀、自ら干乾びてしまふより他はないから、長く尻を落ち付けて、訓育の任に

当るものは少かつた。近年商用を帯びて、大阪に籍を移したものは、段々数を増し、其人は九分通り、大阪風に同化されても、同化せられざる一分の学問崇拜の気質は、依然として保存された。大阪人が他国人を同化したように、他国人は亦市民を同化し始めた。即ちいたちごつこの成り行で、雙方とも一理窟ある。其間に纏綿(めんからみ)する事情の如何にデリケートであつたかは、推察に難くない。大阪市民は、概して学問嫌いであつても、普通教育には頗る身を容れ、小学校建築の如きは、明治初年から美を競つたのである。只高尚な学問の不用を信じて疑わなかつたのである。

他国人が入込んで来て何を、間違ひなく是等も亦商業に従事する。資本は市民が豊富に持つてゐる。之を運轉し、按配し、又融通する本能に至つては、旧来在任の大阪つ子より、餘程辣腕である。そうこうする内、商売と実権とを握るものは、大阪つ子にあらずして、他国人となつた。彼等は純大阪人の及ばぬ手腕を發揮し、益々大阪の富を増殖するはよけれども、事實旨い汁を吸ひ、又之を味うものは表裏したから、大阪市民は堪らない。何が違うかと言へば、学問したと、之を擯斥したとの間に變化を生じて来た。もと丁稚(でっち)（商家に住込みで年季奉公をし、雑役に従事した年少者）小僧として冷遇していた奴は、主人公を凌いで大きな資本を運轉し、莫大な利益を壟断する狀況を示して、型の如く事業をやつて来たものが、今日では時代遅れの感を生ずるに至つた。或る富豪の如き、一時天下一の財産家を以て鳴っていたが、遂に他国人の力を籍りて、今尚存してはいるが、順番から申せば、著るしき落伍を現して来た。丁度小学生が、昔は主席を占めていたが、ちよつとした油断から、甚だしく席順を狂わして来たと相似ている。

是迄大阪商人の取扱つた販売は、専ら関西地方に限られた。従つてそれが日本全国を席捲した訳ではない。兎も角御得意先は関西に限られていた。旧慣を墨守すれば、其販路以外は顧みないはずであるが、こんな狭い

範圍に限らるれば、利益は少く、又商品の製造も、敢て活気を呈しない。今少し拡張せねば行詰る。そこで海外販路を支那に求めたところが、相応反響が顕われた。関西を拡げて十八省に侵入し始めたのが、そもそも海外貿易の根源である。之に味を占めては逆も中止できないとて、支那より遠い所にも及ぼし度い考えに捉われ、南洋方面から印度欧米まで股に掛けて商売すれば、昔の関西のみに限られた場合に比し、利益は昂上して来た。其影響は愈々市民を奮励せしむる動機となり、従来の遣り口では到底行かぬぞ、良好なる製品を、欧米人に負けず、廉価に輸出せねばならぬ。機械の精巧に著眼せねばならぬと更に痛切に感じて来た。即ち海外貿易の利あるを覚つた以上、之に由つて一儲けせねば、大阪の面目に關すと、有識者は煩惱の夢に驅られた。結局大学設立の急を絶叫したのは、海外貿易の発展に資するが、最も重要な案件でありしことは、今日疑いを容るる餘地なきを誰も知つて居ながら、明らさまに実を吐かずして、大学設立とのみ声を高くしたのは、蓋し数十年前に、既に設くべき大学を、今日まで等閑に付し、切羽つまつて其本源を明言せざりしを遺憾とした。結局大学創立は商売懸け引きの一端と解釈すべきを至当と認むるのである。一言にして之を評すれば、大阪市民は負惜みの強い性質を帯びていると言わねばならぬ。

学問は大阪氣質に合わぬものと、旧幕時代の思想を継承した人は一概に呑み込んで居る。役に立つや否やは知らぬけれども、商業学校位は無くては濟むまい。又いく百万の人口を包容している都市に、立派な病院がなくは、衛生状態も懸念される。輸入し来るペストや天然痘もあることだから、医学校も設けねばならぬ。工業の発展に伴い、技師も養成せねばならぬ。なんのかんのと、多少の教育制を布いて、市民の福祉を増進せねばならなかつた。此の如き改善に努むる方針は知識階級に普及して来た。然し其程度は餘り高める必要を感じなかつた。言わば一時の氣安めと評すべきであつた。其故工業学校の如きは、名は高工と称すれども、実は

速成で、直に工場の躍進に加担し得る程度の教育を授けた。一時大学に昇格の議論もあつたが、校長安永義章が、大学に昇格は断じて相成らぬ、本校は直に工業技師になり得る学生を收容するのである。学課の程度を高めて、新しき研究を為すとか、発明に従事するとか云う風の人を養成するのでは無いと、明確に語つた話から推論すれば、校長は其頃まだ大阪の工業界が、世界的飛躍を為す如き、雄大な発展を夢みなかつたであろう。又先きの先きが見える人でも無かつた。只目前の状態に捉われ、現在のみ立脚して議論したに相違ない。此の如き目先き真暗な人の言論は、深く咎むるに足らない。故に安永は安永として置き、大阪市民も亦支那貿易が関の山だと考え、今日の如き進運に心付かなかつた者が多かつたろうから、安永の議論は、市民の意見を幾分代表したものと見て差支あるまい。此流儀に甘じて、高工を卒業したものの為す仕事は知れたもので、如何様もの（にせ）と言つては失敬かも知れぬが、外国まがいの製品に力を盡して、之に酷似すれば能事（なすべ）了れりと考えた連中が多きを占めたではあるまいか。況んや大阪製品は、其価廉なるを以て、東洋方面に持て囃された時代であれば、其オリジナリティを缺いていたことも思い当るのである。然し幸に校長の所見を超越して、獨創的研究とか発明を為し遂げた卒業生が出たのは、国家の為に慶賀せざるを得ないのである。

或る時期まで、旧思想に埋もれた大阪人は老耄した趣があり、又之に相槌を打つた安永輩も亦其部類に属すると言わねばならぬ。老人は若い者の為すこと言うことに満足せず、小癩な奴原と罵るを常とする。若い者は耄碌しあがつてと、地団太を踏むは何事に限らず観測せらるる。見よ、いつの間にか医学校は医科大学となり、高等工業学校は工業大学となり、独り若い者ばかりでなく、有識者は世の進運に推移して行動する。而して實際は、医大でも工大でも、大なる内容の差は「大」の字を冠して見出されなかつた。然し精神的には妙

なもので、何やら昂上した気持ちになり、若い者は、之を實現すると向きになつて勉強する。是れ実に大の字の賜である。其結果、学問は益々進む、設備は良くなる。校舎も拡張される。優良学生は集つて来る。思わざるところに便宜と利益が生ずる。一見形式上のみの変化であるけれども、諺に、馬子にも衣裳と申すに違わず、不可思議な影響を及ぼすものである。ここまで考えなかつたのは、老人の千慮の一失と言わねばならぬ。

医科大学は終始市民の歡心を買うに努めていたが、工大は反対の態度を執つた。之は文部省直轄である。医大は府立である。其間に官僚式に稽かんがうれば、大なる差違がある。長く官僚界に遊泳していた校長は、市民との接触よく宜しきを得ず、吾は文部所屬である。只大阪市に在ると云うだけの他、吾不関焉われかんせずんの態度を赤裸々に表現した。元來デモクラチックの念慮に富んでいる市民は、之を視て不快に堪えず、工大何ぞ能く為さん、邪魔怪じやまつけなとの感を抱くもの往々あつたことは事實が証明している。其故卒業生の行末も、亦頗すこぶる暗澹として居た。其頃市民に印した工大に対する反感は、今尚なほ幾分の暗影を止めている。即ちあんな学校は、大阪市に何も關係無いものじゃ、有つても無くても構わぬものじゃ、まして教員等に禄なものはいない。金など寄付すべき学校でないとの感情を喚起した。今になつて見ると、一理あるようだが、悪いものを指せば御ごもつとも尤だ。良い方を示せば、若手の教員には中々えら物がある。将来工大の為に大に名声を馳すべき人物がある。然し同穴しかの狐である以上、概して其本能を認められず、悪い僚輩の責をも一緒に冠らなければならぬ破目に陥つたのは、甚だ氣の毒に存する。雪辱の期は近きにありと推察するから心配は無用である。

数年来の大阪は、其昔と打つて變つて、本当の貿易、しかも世界貿易を支配するまでに進歩し、製品の良巧なる、紡績の如きはランカシャー(イギリス、イングランド北西部の州。綿工業の中心地)を凌駕する域に達した。この点より考うれば、安永老の迷夢は一笑に付すべきである。剩あまつぎえ商品の販路は、関西に限定された旧慣を脱しなかつた大阪商人の一

部は、洵まことに日腐れで、先きの見えぬ愚物が、盲目同志のいきかきをやっていたも同然である。ここまで進めば、欲に欲を重ね、東洋ばかりが勢力範囲でない。世界全体を通じて商戦を開始すべき基礎を据え、欧米と拮抗する発明進展を促がさねば、此盛運は永続しない。将来まで因循姑息ではやりきれぬ。一言すれば智慧較べである。老朽した思想では駄目である。世界を達観した新進気鋭の士に待たなければ、大阪の繁栄は増進しない。諸般の学問を融通して、然る後に完まきを得べしとは、智者を踈またざるところ、帝国大学を創設して、総合大学となすが万全の策であるは、火を賭みるより明かである。此秋実あきみに然しかりとなすは、市民大体の議論であつたろうと推測するに敢あて難あしく無い。

X

前提はまだ終らぬ。濱尾先生の亜流を汲めばまだまだ書かねばならぬ、旋風式に論ずれば今少し辛抱して読んでもらわねばならぬ。

機至て之に乗ぜざれば、反かえて其咎とがを受くとは、昔から言つたことである。適たまたま々決行の意志薄弱にして、遂ついに世の笑となること多し。其滑稽な一例を挙げれば、こんな話を聞いた。東京府会議長を長く務めた芳野世経氏は、丁髻ちんまげを断きらなかつた。嘗かつてコンノート（一八五〇—一九四二年。イギリスのヴィクトリア女王の三男コンノート公。一八九〇年以來四回来日）殿下が、訪日の際、日本人の特徴である丁髻ちんまげを或る書で読んだが一向見当らない。是非其実物を見たいと御所望おんまがあつたそうだ。然しかるに東京市催の歓迎会に臨まれしとき、そこに議長の芳野君、袴羽織はかまで下駄を履き、相変らずの丁髻ちんまげで出迎えられた。殿下は之を見て大に喜び、久しく憧がれていた丁髻ちんまげの日本武士をここで初めて実見することを得たと、非常に興に入らせられたとのことである。世経氏は、誰も知る通り、金陵（芳野金陵。一八〇三—一八七八年。江戸時代後期の儒者）先生の息（息子）で、漢学を修め、頗すこぶる守旧主義であれば、世風を追うて丁髻ちんまげを断きるを肯がじなかつた。然しかし聖人は世

と推移す（屈原『漁夫辞』の一節。聖人）と謡われたのだから、日本人の知識階級が散髪になった暁には、いくら頑固なればとて、被髪（ざん）左衽（さじん）の習俗を距ること遠からずと解釈し、丁髷姿（ちんまげ）に恋々たるは、片意地のよように思わる。孔子も亦左程まで力瘤を入れて教訓したか疑わしい。何も丁髷を断つたからとて、自分の本質を喪失する訳はない。世の向うところに従うが、寧ろ当を得ている。芳野氏はそうこうする内、仲間はずれとなり、只独り丁髷を翳（えい）しているようになった。そうなると負惜（まげおし）みが其性質に反応し、益々前論を固執したくなるは人間の素質である。こんなになつてから、どんなに人が勧めても無効である。言えば言うほど固くなる。芳野氏が終生丁髷の異様を演じたのは、全く機を失つた咎に基くと言わねばならぬ。

大阪人の学問嫌いは、芳野氏の西洋嫌いと同格である。其大学を久しき以前に創設しなかつたのは、丁髷を断（き）ることを芳野氏が肯（がえん）じなかつたのと平行する。今となつては、祖先から承継いだ市の習慣を破壊して、新に大学設置を絶叫すべき時期でなくなつた。頑固にも其片意地を徹底せしめねばならぬ。他所から見れば何んだか変だな、此三百万を包容する繁華な都会に大学がないか、僅に二十万の仙台にもある。札幌にもあるのに、頑として動かぬは笑止千万、誰にも訝（いぶか）られてゐることは万承知である。如何にせん機既に晩（おそ）し、今更其必要を鼓吹するもおかしい。鼓吹したくも旨い方便がない。策の出るところを知らぬ折から、海外進出の商売に大利益あることが判明した。利益と来ては市民熱狂の的である。市の心臓は鼓動する。立ても坐ても其利益問題は討究せねばならぬ。愈々外国に進出するとすれば容易の業でない。旧来の関西貿易のように易くは行われぬ。相手は皆外国商人である。西洋の事情に精通せねばならぬ。商品の優秀を以て競争場裏に馳逐せねばならぬ。又大量生産の方法も行わねばならぬ。薄利多売は販路を拡張する場合に適用すべきである。是までの商売流儀とは趣を異にすと、市民全体が痛感した。痛感したのが此利益問題を放棄するは勿体（もったい）

ない。宝の山に入て宝を探らざるに均しい。そうなれば犠牲を払つても海外貿易で儲けねばならぬ。是は祖先が夢みなかつた利益の本源である。我邦の東洋に覇権を揮うも、之より始まるは推して知るべし、今度は從來と違い、本格的に商売に乗出さねばならぬ。学術上に基礎を置き、歩調を整えて動かねばならぬ。若し疇昔(先づ)まで守り来りし大阪の市憲を参照すれば、今日の海外貿易ほど重大なるはない。大礼には小讓を辞せず、大行には細瑾を顧みず(『史記』項羽本紀の樊噲の言葉)、こんな時機に臨んでは、今迄頑張り通した大学無用論は撤回しても苦しくない。利を見て為さざるは勇なきなり(論語・為政編の義を見てせざるは勇無きなり)をもしつたもの。大学設立は焦眉の急である。此秋を失つて百年の悔を貽すは、智者の敢て為さざるところである。全市挙つて其創立に共鳴すべしとは、実に外国貿易の刺戟に依るものである。噫、旧思想の弊を革新するの要は、啻に之のみならず、時世の推移に応ずるの策を講ずるは目下各般の急務ではないか。

大阪市民には美質がある。祖先伝来の利に趨ることを現今に至るまで放棄しないと同様、種種の善良な計画、もしくは有利なる策謀があれば決して之を見逃さない。然し一方には善良なるも、他方には頗る不利益な結果を齎すは、世間の事物皆然りであれば、容易に埒の明かぬことがある。従つて之に付随する諸般の問題は、一応之を検討せねばならぬ。其調査を為し、いざ実施するとなれば、種々複雑な議論批難が沸騰して、くだらぬ事項に長広舌を揮わねばならぬ。こんな無用の混乱を惹き起す為め、遂に倦怠を催し、好機を逸することは少くない。仮りに東京市の如き智識階級の人があり餘つてゐる処では、兎角議論に花を咲かせ、善良なる攫みどころを棄てて、遂に其要点を他に移す場合も往々見受ける。結局むぐり(もぐり)辯護士風の議論に、重心は動かされて、其核心を逃すが如き観がある。東京に花々しい発展を期待すべからざるは、専ら横槍を入れる陋輩が沢山あるからである。大阪にも中々論客は多いようであるけれども、割合に的を外れた議論に耳を傾く

る市民は少い。大阪人は幾何か東京人に比して、理解力に富んでゐるかの如き感じを生ぜしむる。畢竟先祖代々関西貿易に従事し、他藩の人との接触頻繁であつたから、頭腦の動きは円滑で、是非の判別頗る明晰になつていた為であろう。一言すれば、世間の状勢に眼が明いているから、くだらぬ問題に拘泥せず、従つて事業に邁進するに、勇氣あり、実力あり、他に引けをとらぬ氣象に横溢している。試みに見よ、大阪に集注する電車の多いこと、其快速乗降の敏速なる、実に模範的に進んでゐる。殊に阪急の如き、終点にデパートを設け、大阪に出入する人の為に便利を図つてゐる。従つて此施設の為め会社の受くる利益も亦莫大である。南海鉄道も之に倣つて、巨大の利益を収めつつある。此流儀は東京でも行われ、將に全国を風靡せんとしている。利益、利益。之に対して大阪市民は何の容赦もなく収受するに努力している。手の動くところ、足の踏むところ、舌の廻るところ、頭腦の考慮するところ、皆之れ利益に焦点を結ぶのである。それ故一度利益あるを認むれば、之に向つて猛進するは、其議論を少くして、実効を収むるに急なる美風である。東京では昔の神田つ子氣象（氣性と）が今日に至りなお瀾漫し、言論は何でもよいから、一肌抜いで閉口ましてやろうと云う。御山の大将おれ独りの幼稚な考えに捉われている。之に加えて下級に至つては、宵越の金はつかわぬと云う。俠氣肌が、幾分残つていて、貯蓄の觀念に乏しく、反つて之を批難するの傾向を有するは、誰も承知している。其故東京人は大阪人を「けち」だと、単に之を見下げるに止まつてゐる。是や彼やで、大阪市民の言論に淡泊にして、實際を重んじてゐるところは、東京市民が到底及ばざるところあるを確認する。

利を逐うは魚を逐うに異ならず、世界貿易は遠洋漁業の如し、遠洋漁業の拓げざる時代には、鯉を太平洋で漁するものは、鯛の餌を用意し、押し切り船を装うて漕ぎ出で、魚群の来るを待ちたる歴史がある。大阪人の関西貿易をやつたと大差ない。然るに今日の急務は、何処に魚群ありやを確むるが第一である。太平洋

の波濤を横ぎりて、船は出したが狂瀾に妨げられて、魚群の集来を察するに方便なきを如何せん、例え魚群の位置を知りても、其運動は船の進行に比して、決して遅緩でない。之を追い駈けて奇利を博するは、屢々あるべからず。然し現今は、人智の啓発により、之を自由にすることを得た。発動機を漁船に据付くれば、魚群を追及するに何の困難は無い。又其所在を偵察するに、飛行機を使用すれば、波浪の洋面を揺がすものありても能く数尋（水深の単位。一尋は五尺または六尺）の深さを覗き得るのである。剩あまつぎえ飛行速度は、魚の能く及ぶところでない。船を呼び寄するには無線通信で談話し得るから、昔苦にした事柄は、殆ど總て解消してしまった。勞せずして功を収むること、押し切り時代に十倍す。是れ明かに旧慣を脱して、文明の利器を応用した利得である。漁業にして既に然り、大阪市に代表せらるる百般の工業が、学問の力を籍りて、此の如き進歩を為し得ば海外に販路を拓ひらき、欧米と拮抗するも敢て難きにあらず、百尺竿頭一步を進むる（すでに工夫を盡した上にさらに工夫を加えること）手段として、其源泉を大阪に置き、然る後其利用を講ずるは万全の策であるは、大阪市民の頭脳に痛く感じた一つの例証である。祖先伝来の利益問題で、最高峰を占めねばならぬ。従来一家秘伝の方法を墨守し、細く永く、小成に安んずべき利にあらず、學術の粹を錘めて飛躍すべき時代は来れる、一日も躊躇すべきにあらず、嫌いな学問にも、深く利益が埋藏してあるぞ。丁髻ちよんまげを断るに気が向かなかつたけれども、とうとう断つてしまった。我々も今度こそは、いやな想でない、よい将来を祝福して、学問の府を大阪に設けねば、商売に引けを取るぞ。一日も遲疑すべからずとは市の当時の輿論よろんと見なければならぬ。

×

仮りに濱尾さんが存命であつて、大阪に帝大を新設するに、市民が白熱戦を演じていると聞かれたならば、どんな批評を下さるるであろうか、老人は古い事情を知っている。また之を講釈するを其本分と心得ている。

されば恐らくこんな話をなすだろう。イギリスの誇とする大学町は、ケンブリッジとオックスフォードだ、何れも片田舎に偏在して、都会の俗塵を超脱している。あんなに環境が閑静で気の散らぬような処でなければ、学問は身に滲まぬ、大阪の如き黄塵万丈、商売の巢窟に学問所を選定するは、以てのほかである。まして近所の京都（京都帝国大学は一八九七年に設置）にもあるではないか、不心得千万であると、一言の下に匆ね付けるであろう。独り濱尾さんばかりでは無い。概して老人の意見を叩けば、必ずそんな結論に帰著する。又普通人の論評も此辺に落ちつくであろう。

明治十六七（一八八三—一八八四）年の頃、予は屢々鴻の台（現・千葉縣市川市国府台）に草鞋履（ぞうり）きで遠足した。真間（国府台に隣接。真間の手児奈の伝説は著名）の附近から、里見に縁ある古寺の辺まで、文部省用地の標札が建ててあつた。即ち今の陸軍用地は、其の跡を引受けたのであろう。何の為め文部省は、こんな片田舎に地面が入用かと聞（ききただ）糺してみると、前に記したイギリス流の大学を建設しようと目論見たのだそうだ。大学南校（一八七〇年設立）が開成学校（一八七三年）になつた頃、当局の考では、神田一つ橋の界限は皆市街で、学生を育てるには不適當な位置を占めてゐる。俗でもあるし、風儀もよろしくないから、辺鄙な場所を卜（ぼく）して移転しようとした。鴻の台は遠からず近からず、しかも健康地であるから、引越しをしようと計画したけれども、大なる障礙（しょうがい）に衝突した。其時分の教授の大半は外国人であつた。彼等の為に官舎を建て、又毎日、日用品の需に応じなければならぬ。今日と違い、電車は無し、馬車か人力車で往復すれば、其繁に堪えない。迎（むか）も外国教師を居住せしめ、且つ多数の学生を收容するには不便であるから企図は断念され、終（つい）に移転は沙汰止みになつたそうだ。又之に類した動向のあつたのは、京阪地方に大学がなくてはならぬが、前の理想を貫徹するには、矢張り辺鄙がよからう。それには伏見桃山地方が物色されていたことは確かである。是は敷地を選定して、標札を打つまでには進まずして中止されたのである。是等は

皆ケンブリッジ劍橋、牛オックスフォード津を理想の大学であるとして打算された豫定であつて、想うに濱尾さんや其僚輩さしがねの指金に基く案であろう。是等の人は、成る可べく大学を活社会から遠ざけようと計画したのである。今日から観れば此の如き大学は迂遠そせりの謗を免れない。

斯かく論ずる人は劍橋、牛津ケンブリッジ オックスフォードの創立より其沿革を詳つまびらかにせず、只現状のみを觀察して、之を模倣せんとした錯誤に陥つた過程を物語っている。中世紀に僧侶間に流布されたバイブルの解釈は、多岐多様であつた。恰あたかも四書五經（大学、中庸、論語、孟子、易）の註釈が沢山あつたに均ひとしい。是等を誤謬なく、見解の縛もつれを解くには、諸派の僧侶が寄合つて議論を上下し、是非を検討せねばならぬ。其目的を遂行するには、俗界から遠ざかつた地域に閉じ籠り、静思黙考して互に応酬せねばならぬと一決し、それが卵となつて遂つひに大学に孵化したのである。其証拠には、劍橋、牛津ケンブリッジ オックスフォードに数多いカレッジに小寺院が設けられ、儀式は概して宗教的である。予が時々着用するを餘儀なくさるる劍橋理博ケンブリッジの学位服は、緋色で僧衣に同じく、長い袖が付いている。其袖が日本流のものと異つて、細長い袋になつて左右にぶらさがつて居る。其説明を故グレーズブルック博士に求めた。昔し劍橋ケンブリッジが神学者の集会所であつた時代には、僧侶達は托鉢たくはつに出てパンを貰い、長袖に納めた。其遺物が二十世紀の今日まで歴然と趾を留めているので、別に深い意味あるものではない。言わば大学の由緒を暗示する記念袖であると答えた。牛津オックスフォードに於ても同様である。然らば是等の大学の濫觴らんしやう（起源）は、神学攻究である。然るに時勢の進運に連れ、幾変遷を経て、現今の隆盛を来したので、其土地の選択は、神学研究に最適とせられたのであるから、数世紀を経て、学科の趨勢大いに転変した後、其最適の位置を指摘するならば、議論の立脚点が著しく異つて来る。従つて他の場所が良いと云うことにならう。実際に就て見るに、物理学電氣工学方面で、もし夜間数十キロワットの電力を使用するときは、劍橋ケンブリッジの住民は僅に五方に過ぎないから、

電燈の灯が薄くなつて困るそうだ。又実験材料の供給を仰ぐは多くロンドンに頼つていたので、即座の要求に応ずる能^{あた}わず、病院などと来ては、てんで物にならず、医学も工学も理学も、時として非常に迷惑するは当然の帰結である。只困らないのは人文方面に限られている。さればかような実験方面の学問を開拓するには、いや応なしに、大都市に接続した処でなくては不適當であること論を俟^またない。然^{しか}るに実験研究は、逐年大装置に趨^{はし}りつつある状態より推せば、大都市が最も便利で、且つ要求に順応する可能性を具有している。又学生の風儀問題に対しても同様である。劍橋^{ケンブリッジ}で不良学生を追蹤^{ついで}するは、ブルドッグ(監督の渾名^{あだな})の役目で、難しくないが、ロンドンに高飛びする遊蕩学生には、何の制裁を加^{すべ}うる術がない。之に類した状況は、日本の田舎大学でも覗^{しほ}われる。そは実験に就て、又学生の監督に就てもある。殊に風儀を紊^{みだ}るものは、学生から金を搾^{しぼ}り取ろうとするが唯一の目的である。学生の懐から出る金は知れた額であれば、都会では一向顧客の如く取扱われぬ。反^{かえり}て田舎では、学生の消費額でさえも相当に潤うので、学生様々とあがめる。其結果決してよろしくない。都会で顧られないより悪影響を蒙^{かぶ}むことが多い。

大学を田舎町に設けよと論ずる者は、劍橋^{ケンブリッジ}、牛津^{オックスフォード}に重点を措いて、パリ、ベルリン、シカゴなどの大都会に在る大学を忘れてゐる。ソルボンヌの大学は、中世紀に創立せられ、パリの市中にある。之を出でて名を輝した人の多きは、記述するを要せぬ。パリは歐洲文化の焦点と目せられているにより、他国から遊学して、ここで研鑽を重ねるもの今なお多し。ベルリン大学は一八一〇年に創立されて、比較的新しい為か、市の最も繁華な街道ウンテルデン・リンデンに設けられてある。ロンドンにも数個の大学があるけれども、劍橋^{ケンブリッジ}、牛津^{オックスフォード}に比ぶれば劣る点がある。是等は其内合併せられて、両大学を凌駕する氣運を生ずるやも期すべからず、大学の榮枯もまた人生に均^{ひと}しく消長あれば、今を以て将来を卜^{ぼく}するは数の得たるものにあらず。要する

に教授と学生の良否によつて盛衰は決せらるるのである。ドイツには数多の古い大学はあるが、法文学を骨子として創設されたのが大部分を占めているから、当然辺鄙にあるのは、劍橋牛津ケンブリッジ オックスフォードと全く趣おもむきを同うしている。未来は推すること不可能であるけれども、駉々しんしん（速速く進進む）として進む理工方面に於て、田舎大学は漸次衰微する一方ではあるまいか。殊に医学の研究材料に供する病人は、どうしても都市を択えらばねば、十分に患者を学生に手懸けしむること困難である。

アメリカに数多い大学のうちで、シカゴは牛耳を執っている（実力で支配するの意）にも拘かからず、米国第二の大都市に設けられてある。ドイツではゲッチンゲンとかエナとか、辺鄙の大学で、相当重要視されるものがあるが、近代の理工学科に至ては、どうしても大都市の方が、凡すべて便利であるのみならず、教授学生等の研究勉学は、敏速に成果を与うる理由のもとに、フランクフルトやハンブルクに大学を新設し好成績を挙げている。何となれば、前世紀の学生は、学問を嗜たしなむか、或は学者になつて身を立てようとするものの門戸が大学であると心得ていたが、近代になりては、世上に学問を応用して、大に働こうとする者が多いので、学者になる調子の人は僅少である。即ち潜心学問にかじり付て離さぬ流儀の人は少くして、寧むしろ学問を適切に利用したい望をもつてゐる者が多分を占むるに至つた。其為には大都市で、学生時代から活世界を目撃し、其状態の一般を納得し、之に処する最善の道を豫想せしむるが、其当を得たものである。殊に我邦の目下の形勢より論ずれば辺鄙の大学にありし者は、動やもすれば田舎臭を帯びて、其臭気が永く抜けないので閉口する者がある。又大学は概して高等職業紹介所であり、求職を目的として入学する学生が大部分である。即ち活世界に終始する関門であると心得ているものが多いことを考えてみれば、辺鄙必しも学生の要求を満足せしむる処ではない理由を覚るのである。

人文方面ではいざ知らず、大阪市民の要求する学科は、医・理・工の三学部で、口舌を以て仕事をする方面の人は、他に官私大学があるによつて、当座不必要だとの一般の希望であつたから、かかる実験的学問に対しては、前述の如く、大阪の如き大都市の中央に置いて差支ない。否、其方が万事都合好いのである。幸に大
 学病院附近に、理学部を建築すべき明き地があつたから、別に土地を購入する煩いはない、又医工両部は既設のものを帝大となすのみであれば、至つて手軽に行われるのであつた。

阪大創立運動は、一時大阪市に於て猛烈であつた。発起人の頭目と見るべき知事柴田善三郎、市長関一、大阪に同化された他国人楠本長三郎、坂田幹太、木間瀬策三五氏の内で、後の三人には予の所説を打明けたこと前述の如しである。殊に楠本氏とは、懇切に阪大の必要を論じ、又創立運動を激励し、多少の方策をも授けた。然し昭和六年三月其運動は遂に暗礁に乗り上げた。文部省では栗屋謙氏を總長の椅子に据えろと主張し、大阪側では御払箱は頂戴致し難く、楠本氏を挙げたらばどうかと申出したところ、まだ貫禄が足らないからいかぬと、雙方睨み合の姿勢となり、阪大運動の船は暗礁に堅く嵌つて、如何にタグボートで引き卸そうとしても、にっちもさっちも浮びそうに見えない。致方なく、種々の他の候補者を考えても、適當とは思えない。是まで骨折つて、百方手を盡して百日の説法屁一つで空に飛ぶのか、残念だなと思案に暮れている折柄、運動員の一名がやつて来て、「あなた總長になつて下さらんか、そうすると文部省も枢密院も平穩に通過し、大阪方も満足ですから、丁度暗礁に乗り上げた船が、大潮でふわりと浮き揚ると同様です。どうぞそうして頂きましよう」と言つたには、予も寝耳に水、そんな気があつたのならば、最初から相談すればよいに、今になつて窮状を救うに、出来ない案件を提出するは聞えぬ次第ではありませんか。元来予は研究一方の人間で、總長などは柄にないのだ、予の考えでは、總長は事務を司るお役人で、是迄予は嘗てそんな事にたずさわつたことはない

のみか、性来大嫌いであれば、言うべくして行うべからざる案件だ。眞平御免を蒙ると、即席に断つた。然るに、「まーそう言わずに、ちよつとなりとも引受けて下さらぬか」と折返し話したが、どうしてもそれは駄目だよ、誰の考だか知らぬが、妙な所にお鉢が廻つて来たものだと、惘然として自失、後は何とも考えなかつた。

×

新聞記者はさすが耳の聰いものだ。かくならでは記者は務まらないだろうが、何所から漏れたか判然せぬけれども、此話があると、翌朝踵を接してあらゆる新聞社から記者が訪問して、門前市をなす騒ぎであつた。しかし言うことは皆同様で、阪大總長を御引受けになりますか、待望の的となつていますから、御意向を伺いに参りましたと、異口同音であつた。予もまた対異同音で適材適所と申しますが、事務にかけては私は最も不得手です。大分總長希望者があるようだから其方に御廻しになればよいではありませんか、こんな老骨が返り咲きなんか、思もありませんと承諾の意なきを明にした。此調子で応待に違ないから、ちよつと隙を覗い、勝手口から行先を暗まし、理化学研究所に逃げ込んだ。晩帰宅すると同様飯も喰えない状態であつたが、今度は記者連が面白い情報を齎して来たので、頤を外す閑があつた。しかして誰が予を總長候補者に推挙したか言つてくれと索りを入れて見たが、此核点はどうしても握り得なかつた。射人先射馬（杜甫「前出」塞「其六」）で、推薦者を捉えて談じ込まねば、到底埒があかぬ。そもそも其人は誰であろうか、根掘り葉掘り記者に質問しても、要領を得ない。今となりては、探究しても無用であれば、餘り気に留めなかつたが、終に本年一月十九日まで、其発案者を突き止むることが不可能であつた。其間五年を経過した。

×

二月号の本誌（『文藝春秋』一九三六年二月号）に、来間君は次の通り書かれた。「文部省畑の大御所格であつた岡田良平氏が、暮

夜秘かにといおうか、早春の夜もまだ明け切らぬ午前六時ごろ、コッソリと小石川の自邸から麻布の田中文相へ自動車飛ばし、栗屋氏推薦の役をつとめたなど……」読んでここに至り、久しく予の脳裡に凝滞していた謎が氷積した。岡田氏がもと文部省の下僚であった栗屋氏を推挙するに、何故にこつそり人目を憚り、明け鳥の啼き声を聴きつつ、門を叩き、主人の寝耳を驚かす訪問を敢てしたか。白昼大ぴらにやるが当然だ。誰が其事を知っても差支ない。それに拘らず隠密な常軌を脱した行動は、常識で判断し難く、意味深長である。栗屋氏を長岡氏に改むるが肯綮（急所）に中つている。いかに敏感な新聞記者でも、予と濱尾總長との押し問答をした東北大学行きのいきさつを詳にしていまい。単に岡田氏は文部省系に属するから栗屋氏と書かれたのであろう。他の記者も同様な観察をしたに違いない。若し其当時此事ありしを予に知らしめたならば、予は岡田氏に反対運動を試みたのであるが、惜いことに遂に臍を噬むも、及ぶなき憾を貽したのである。

東北大学行きの事実を告白すると、福原氏は勿論であるが、背後に岡田氏が、当時次官であったと記憶するが、非常に力瘤を入れて、予の東北大学行きを慫慂したのである。岡田氏は文部系であるけれども、ややもすると人の意表に出る意見を吐露し、他に好ましくならぬ感情を誘発した例がある。予の東北大学行き留め運動を濱尾總長に持ちかけられたのも、之に関連した飛ばつちりから起つたのである。されば予が東北大学行きを思い止まったとき、最も落胆したのは岡田氏であった。阪大運動時期になつては、濱尾さんは亡くなつている。予も停年制で既に大学の羈絆を脱している。だから、岡田氏は前論を踏襲して、予を再び推挙したと判断するが至当である。又阪大運動員が、枢密院にも障礙は除去せらるると話したのは、一縷の引きかかりあるは明白だ。情報通がなぜ岡田氏文相訪問の一線を当時知らせてくれなかつたか、此恨綿々絶期無しと言ふべきである。

×

人事意の如くならず、世は儘にならぬとは云うものの、大阪では非常に總長になりたいと希望した人があつて、或る新聞には彼れは總長病に罹れりとまで書かれたと、消息通は話した。そんなに大学創立に熱心で、言わば大学に恋するような病であれば、必ず創業の際は旨くやるだろう。なぜそんな適当な人に總長を廻さないのか、予は諒解に苦しむ。予の如き總長嫌疑病に罹っているものを、無理に引き摺り出さぬでもよいじゃないか、餘りにしつこい、よい加減にケリを付けければ事は収る。其總長病とやらに罹っている人は誰だ、記者曰く、人の名は打開けられません、運動員に加わらない御方です。そして文部省に提出すれば、到底通過しないのですから御説のように円滑には参りません。それで大阪市民は弱り切っているのです。此際是非御出馬を願わないと絶望ですと、懇々説き了つて、予の了解を求めた。予は之に答えて、總長は大学の事務官長のようなもので、学問とは餘り関係のない仕事をするのである。言わば汽車の切符切りの毛の生えたようなものだ。何でも文部省の法規に定められた通りやらないと、狭み込んだ形が寸毫も違えば、直にお目玉を頂戴する。其型を調べるのは属官で、少く異るところあれば、課長や局長に廻り、矢張り旋風式の行動を経て、遂に裁断を仰ぐことになる。漫言子の説に従えば、丸で去勢されない宦官の支配を受けるようなもの、或は徳川時代の政治が大奥の意向で左右されたのと餘り変りは無いとのことだ。然し予は之を信ぜぬ。只注意すべきは、局長たり課長たる人が長く其椅子に留まつていれば弊害は滅却してしまうだろうが、事実そうでない。大概数年にして更る。之に反し、属官こそ何十年の久しき其課に止まり、遂に俗に言う主になり、渾名すれば、古狸とか鶴とかであり、是等がいつか魍魎化して、前例など引張り出し、進歩的動向に反対せぬでもない。折角改善を行わんとしても、鉄條網や鹿砦だのを進路にしかけて、旧式に戻そうとする。此要塞を打破せずして、

間道より旨く衝突なく潜り抜けるが、本当の辣腕家である。先ず手づま使（手妻遣い。手品師のこと）の上手なものに似て居る。こんな軽業は予の如き朴念仁（ぼくねんじん）には技倆がない。又それを学ぼうともしない。翻（ひるがえ）つて理学上の研究を見るに、学問の前例破りが十中八九を占めている。例えば、元素は一定不変であつて、其質量は又一定しているという前例からスタートして、水素に原子量一なるものと二なるものとあることを証明すれば、前例破りに相違ないけれども、学問上には偉大なる発見である。又一例を挙げれば、光線は身体を通過するを得ないとの前例がある。然し波長を縮少してエックス線となせば、人体でも透し得る。是又前例破りに他ならぬ。此の如き前例破りは、いつも大喝采を以て学術界に歓迎さるる。若し大学制度或は教授方法に於て之に類する偉大なる革新を行おうとしても、法規に定めた範囲を超越すれば、到底裁決を得られぬ。都合好く行つて、法規改正の上実行に移るを得るのだから、少くも数年を経過して実現するのである。之に反し学問界では即刻効果が現わるるにより、一朝にして雷名を轟すと、全然別物であれば、其間に処する困難苦勞は思いやらる。結局是等の難関を突破する勇氣と耐忍とを備えた人でなければ、總長として名実相適（かな）うこと不可能である。法規の鉄網で圍繞（いによう）された檻に閉じ籠め、前例の鞭で擲（なぐ）らるると来ては、さながら動物園の獅子や虎と區別なく、爪は鋭く牙は強くとも、施すに術なく、見物人の笑となるに過ぎない。各自に特有なる個性を十分發揮するには、独自の立場がある。予は予の立場があり、總長病に罹つた人はまた其立場があろう。予の意見と相容れざるは勿論（もちろん）である。

惟（おも）うに總長病は単種の奇病であつて、其源因はバニティ（vanity）（虚榮）ではないか。日本人は奇妙に「長」の字を付けた名称が好きだ。小中学生徒は級長になりたい。村では村長、一町では町長、一市では市長と、皆長の字で幅をきかせている。大学では庶務、會計の課長、部長、總長など長を付けた官職がある。然し実力（しか）のある

のは教授だ、其等の意見を代表し、文部省へ取次をするのが總長だ。其他總長には外交的仕事もある。しかし個人の意見を貫徹するには、遠慮もあり限定されてもあるから、こんな職掌に惚れ込み、病気にまでなるには、よくよくのヴァニタス・ヴァニタツム(vanitas vanitatum) (ラテン語。軽薄な行動)に沈倫(ちんりん) (おち)した者である。そんな人が常識に富んだ大阪市民の内に現われたとは合点が行かぬ。恐らく地の人ではあるまい。まだ同化し切れない他国人であろうと論じたけれども、記者は談の終りまで名を明さなかつた。又明してもらふ必要もなかつた。互に異つた軌道を辿つていたので、彼我意見を交換する要を感じなかつた。

×

翌日も記者団の訪問に忙殺された。記者は慣用手段で、手を換え品を換え、予の気を引て見る算段をした。其時発見したのは、雙方の見様に大差あることであつた。記者は誰を扱はず、初代阪大總長は非常な名誉職であるから、必ず喜んで之に応ずるだろうと思惟している。予は總長などは尋常一様の事務官に均しい(ひと)。未来永劫なるものでないと決め込んでいるによつて、頑として排斥する。それで意思が殆ど不通となつた。然る(しか)に午後漸く(ようや)二十六計の最善なる方法により、跡を暗まし、理研で研究に従事していると、文相秘書官から電話がかかつた。大臣が上つて御差支(さしつかえ)ありませんかと問われたから、よろしいと返事した。用事は無論言わずして知れている。文相に逢つて話を聞くと、例の事件であつた。既に記者連に答えた意向を繰り返しては餘り無遠慮過ぎるから、一晩熟考の上明朝御返事申上るとお茶を濁して、翌朝体裁よく断つて来た。其時記者等は既に秘書官室に詰めかけていた。予が大臣室を出るや否、何と返事したと訊くから、「勿(もち)よ御断り」と逃るが如く(ごと)自動車で飛ばした。

それにも拘(か)らず、記者と運動員は押しかけた。前者は少しく強請(ゆすり)的に鋒芒(ほうぼう) (ほこ)を露し、後者は愁訴的に

目的達成を図る態度に出で来つた。記者団は、折角大阪市民が旧套きゅうとうを脱して、帝大創立に奮発した挙句、最早事成らんとして、總長問題に絡まり、進退の自由を失い、途方に暮れているに際し、予の一挙手一投足に待つところが多し。しかも予が肯がえんずれば、難関は通過せらるる。恰あたかもぎこちなくなつた齒車に、油を注して円滑に轉てんでん輾ころ（がる）する運びになると同じだから、市民が一齊に共鳴しているのを満足せしむる為め、決心して呉れ。然しからざれば到底設立を見るは不可能であるを以て、怨嗟えんさの聲は、予に対して揚ると云う意味を含ませた。予は之に応じ、諾否を言明するを避けた。なんとなれば創立に対する難所は幾個所もある。予が承諾すれば易やさしく此等の峠を越し得るとは、針小棒大にして、予を誘い出す方便であろう。況いわんや大阪には總長病に罹つた人まであるのだ。大阪でも既に同意せざる者あるは明白である。他の難所はなお更のこと、文部省では相当地慣例に従い、候補者を提示した。それを押し切つて總長になれとは、撞どつちやく著の気味もあり、眉唾ものだから、慎重の態度を持たなければならぬ。まだまだ腑に落ちぬ点が幾らもある。然しかも予は總長になるのを世間で評する程名譽とも思わず、又事務には堪能ならざる性格であるによつて、他に候補者を考へてもらい度いと、こちらから哀願した。

創立運動員は、今度最初に理学部を建てる。医学も工学も其基礎は理学にある。それを無視して枝葉や花を賞しょう翫がんしていても、根本義を忘却している。どうしても予に努力して貰わなければ、理学部の建設、即ち設備教授等は成り立たない。初めから来てもらい度たいのであつたけれども、予の性質は熟知している。それで沈黙していた。今日の破目になつては退くこともできず、進むことはなお更である。真に進退維谷これきわまるの秋であるから、犠牲となる覚悟で、暫しばらくでよいから来阪を乞うとの意味であつた。そこで予は理解に苦むのは、特に理学部に要点を措おくことである。理学部は基礎学を教うるを目的とするけれども、其実効は容易に現れず、諸

現象が人間の用に供せらるるもの極めて少いから、大阪市民は勞して効なく、收支相償わぬのを恨む虞はな
 いか、又眞実の市民の希望は、前に説いた利益問題と相關連するに於ては、理学でなく、反て工学部の擴張
 を図るが、機宜に適した遣り方であろう。兼て理工の關係に就き、運動員の間に何かの誤解がありはしないか
 と論じた。果せるかな、其返答の中に認識不足の点あるをほじくり出した。運動員三名とも東大出身であるが、
 卒業してから既に三十餘年を経過している。今日聞いた議論は、其頃の理工の状況から打算したのである、従
 て現時の如き工学研究の盛なるは全く認識してない。彼等の言うには、工業は単に外国の模倣に汲々として、
 獨創的研究から進歩したものは我邦に於ては稀である。理学の方は相当研究熱が高く、到底工学の及ぶところ
 ではない、又大阪では安永老が嘗て主張した如く、即座に役に立つ人間を養成するに孜々(つとめ)としていた
 から、一層研究心に乏しい。其缺陷を、基礎的に理学の側から補充して行きたい考えである。又医学方面でも、
 理学の知識不足する為め、種々の不便と不可解の事項等が伏在することをほのめかした。是は三十年前と現
 時との状況をごちゃごちゃに混ぜ合せた事情を示すもので、決して工学の近年の進歩を加味したものでない。
 理学方面は自然の探求に趨り、利用厚生方面は無視しての研究が主となつて居る。適々工業其他人生徳用向き
 の結果を得ても、之を理學上に發展し得るものは、餘程の篤志家にあらざれば山師半分の研究家である。エツ
 クス線管の利用頗る多しと雖も、クーリッジなる工學者の發案になる管球(クーリッジが一九一三年に發明したX線を發生する管)を使つて後
 の成果である。電波で無線通信を行うのもマルコーニなる工學者が手を下して初めて実用に供したからであ
 る。此の如く序列し来れば、理学の研究が実効を奏し得るや否の断案を下すは工學者に待たなければならぬ
 は、晩近(頃)發明の歴史により火を睹るより明かである。然るに大阪人の要求する研究は、専ら産業方面に
 有意義のものを撰抜して、之を工業化するにあるのではないか。全市が帝大創立に共鳴した理由は、産業の源

泉を渾々として絶えず遅れず、世界の潮流に乗じて開発し、以て市の殷賑（盛んでに）を促さんとするにあるは、言を俟たざるところである。不幸にして工学方面の機械と応用等は、中学教科書によれば物理や化学に載せてあつて、恰も理学が其啓発に努めたようになつてゐる。無論諸産業の根基は理学に存すると言ふも敢て不可なきを感じるけれども、其芽生えは微弱にして、大事業は概ね之を実用化するにある。而して其实用化は工学的に研究せねばならぬ。合理的に論ずれば、中学教科書中に、別に工学教科書を編纂して生徒に授け、雙方の連絡を明にせねばならぬのに、現時に於ては全く缺けてゐる。今や産業を振興し、世界に飛躍せんとしてゐる日本国が、思い切つて中等学校の生徒に、此国家須要なる根幹的教授を為さぬのは、当事者の怠慢である、今なお等閑に付せらるるは不思議である。目下我邦に於て産業合理化は著々歩を進め、工学上の研究の隆盛に趣きつつあるは旭日の昇るが如く、理学を圧迫して、凡て根本研究まで工学に占領せんと敦圉いてゐる。しかも其方面には、頭腦の優れた人が沢山あるにより、現時の工学を三十餘年前の成績で律するは、大間違の素である。其間に雲泥の差を生じた事實は、輸入防止の点からも分明だし、機械薬品其他の海外に出る額が年々急速度で増加しているので裏書されてある。独り紡績人絹（人造絹糸）ゴム等を以て貿易品と心得るは、大なる錯誤であると、諄々説破したけれども、安永流の意見に拘泥して、工学の重心よりは理学の重心に貫目を付けていたのは不可解であつた。畢竟工業大学が、市民と半絶縁態度を持していたから、工学研究の大切なるを没却したことを暗々裡に摘示してゐる。予は此状態は軽視すべきでない。生兵法大疵の素であるから、理学部設置に付ては、理工共通の研究に従事する学者を招聘するに盡力せねばなるまいと思考し、若し依頼されるれば、其方針で人撰を行わねばならぬと肚を決めた。此談話は後に良好なる嚮導（先に立つて導く）方針を与えた。又創立に熱心なる或る有力者が、理学部の卒業生全部を、大阪市で咀嚼し得ると豪語したと云う話があつた。是も正し

く理工の区別が判明せず、理学を修めたものが、凡て産業の用を為し得ると誤認した結果であろう、認識不足も亦甚しい。其事柄を予が豫め認識し得たのは、何よりの幸福であつた。目下理学と工学の或る方面は、限界が見分け悪いほど接近した。しかし他方面は益々隔離して、秦越の觀を呈するようになった。而して興味深き部分は、反て此両極端に潜在するかと想われる。学生の撰択する学問の分野は、何れが多いか疑問である。

二日経つと文相はまた理研に来て前論を繰返し、更に予が理研に留り、研究しつつ大阪に往復して、總長事務を扱う意味の趣旨を述べ承諾を求めた。條件は幾分緩和したけれども、未来永劫總長になるなど云う確信は動かせなかつた。然し文部省から既に一人の候補者を提出して置きながら、二度も文相が足を理研に運ぶは、之を撤回したと解釈すべきか、それとも予が応じない場合、無理にも押し付ける積りか、曖昧であつた。餘りに懇切に又熱心に相談せらるるから、今度は判然決答し、三顧を煩さない覚悟で、二日間の猶豫を乞うた。之に續て記者団に攻められ、殆ど往生した。宅に歸つて黙考すると、不相変總長嫌疑病が発作した。自分は是迄何の目的で研究しているか、不慣れな事務に困つて、文部省の主と衝突し、槍玉に揚げられたらば、恥辱も亦甚しい。其事あるは確率殆ど一である。誰かを物色して皆を満足せしむるが至当であると考え、『文部省職員録』など引張り出して見るけれども、どうも見当らぬ。一方によければ、他方に悪いので、洵に困つた。而して自分が皆に満足を与うるとは、なお不思議だ、合点が行かない。何か手づま(品手)が使つてあるのでは無いかと訝しい。自信がない。然し大阪に帝大を設くるは雙手を挙げて賛成する。其準備も八九分通り整つて、単に總長で行詰るとは情無い。何か緩和する方便はないかと、対策を練つても妙案が出て来ない。殊に気にかかるは、創立運動者間に、理工の關係に認識不足のあることだ。まずい人が行つて滅茶になり、虻蜂とらぬの結果を来すは、折角の国家的企画を画餅に帰せしむるのだから、細心に考慮せねばならぬけれども、それ

には成案がない。

次の日に来た記者団には両様あつた。其一は最早此頑固翁を説得しても、磐石の如く動かないから、他に名案でもありはしないかと、索りを入れるような話をする。他は強制的にも大阪に連れて行けと、脅迫に近い文句を弄して、其内に気に障らない語句を残すのであつた。是等に対し予は總長の器でないから、行くことは肯じないが、阪大の創立は、国家的重要案件であるから、万難を排して決行せねばならぬ。多大の犠牲を払つても成果を挙げねばならぬと言つた。そうすると気速い『大毎(大阪毎日新聞の略称)』記者は、此話を早呑み込みして、予が承諾したものと解釈し、其晩号外を出したそうだ。所謂新聞辞令と申すものであろう。他の事件とは違い、帝大總長の件につき、号外を出す位だから、大阪の民心が動揺していた証明にはなるが、予は晩八時過ぎ其事を耳にして、二度吃驚(びっく)した。然るに十時過ぎ予に大衝動を与えた事件が起つた。爰(こゝ)にさらけ出すはいかがと思うが、密告者があつた。「先生若し御承諾がなければ、文部省は指定の總長をよこすでしょう。そうなる」と、棒組(問仲)を組織して停車場に待ち構え、是ですぞ」と手真似をして見せた。「それは文教界の大不祥事だ、大学が成立せぬよりなお悪い、破壊的だ、警察で取締つても駄目か」と問えば、「そうなつたところで、市民は満足しませぬから、毒を舐(な)むれば皿までです」と捨鉢の文句を弄した。いかに大学運動の爲め、市民が一時激昂したかが察せらるる。されば号外も無理は無い、寧ろ当然であつた。

号外——密告——二つのシヨックは少からず神経を刺激した。俺が大阪入りをすれば、棒で擲ると言つてくれればまだしもだが、事既にここに至れば、犠牲にならなければならぬか。話に聞く両親の爲に身売りをする娘の心情は、こんなものか知らん。大阪三百万衆の爲に、身売りをする時期は突然目前に迫つた。今は俎板(まないた)の鯉と同じだ、身動きもせず、餘喘奄々(よぜんえんえん)（息たえ）、膾(なます)となるを待つのだと、そぞろに哀れを催して来た。

俺は買ひ被られているぞとは、最初の数声であつた。いよいよ「断」の一字は模糊として眼前にぶらさがつた——待て、待て——進むならば退く方策を講じてからのことだと、暫く躊躇した。

予は昭和六(一九三二)年六月にコペンハーゲンで開かるる国際電波會議に本邦委員として出席すべく、既に通知を發し、五月一日東京發、シベリア經由で行く豫定(シベリア旅行記は、同年六月に「大阪朝日新聞」に連載された。「シベリアの風物」として『隨筆』に収録)になつていた。出發を一日繰り上げ、五月一日大阪で開學式を行い、翌日大阪發で渡歐すれば差支ない。半年間欧米の諸大学を巡覽すれば、参考になる。又機械注文もなされる。其間予の代理を務むるは恐らく楠本であろう。彼は九州人の大阪に同化されたものだ。市民の脈を診た多年の経験から、其氣質は呑み込んである。又帝大創立の肝煎(世話)の一人である。しかのみならず彼は研究家といわんより経営家である、創立には持つて来いの適材だ、貫目(貫)が足らぬと今はけちを付けられても、未来の總長には他に人はあるまい、此際半年間彼が手並を見せると、予の廃業は可能である。最善の退陣策はここにあると一決し、「断」の字は遂に明朗化した。

翌三月十一日の朝理研(理化学研究所)所長大河内子(大河内正敏子爵)に逢うて了解を求めたところ、行くがよからうとの事で、早速文相を訪い、来間君の書かれた條件を付して、承諾の意志を通じた。而して其後は、新造船が滑走台を迂るが如く、一瀉千里で、何の苦もなく経過し、久しく阪大創立を廻りし波瀾は消磨し、平穩鏡の如き觀を呈した。

此際瑣細で書くほどの事件ではないが、一つのエピソードを作つた。予が文相室を出でて帰ろうとすると、記者団が詰めかけていた。其挨拶はきまり文句だが、秘書官室を出るとき、某記者は「先生の帽子はひどいです、古道具屋に持つて行けば一錢五厘ですぬー」と評価した。「そうか、此帽子を冠つて大阪入りをするなと云う意味か、判つた」と言いつつ、予は去つた。しかし此記者の言は、予に対しては第三のシヨックであつ

た。怪しからぬ奴だ、此帽はロンドンのヘンリー・ヒース(Henry Heath's Hat Manufacturers, ロンドンの帽子製造業者。高級シルクハットで有名)で買ったので、最上のフェルトだ。しかも四つ折りに畳まれて平になるから、旅行には至極便利にできている。其価もトップハット(シルクハットの別称)より高い。ヒースの名はクリスチーやポリセリノより格外に聞えている。それに拘らず一錢五厘、実価の千六百分の一と見縊くびられたのは、何か曰くのありそうなことだ。是迄買ひ被られて迷惑したのに、掌を返すが如く、今度は見縊くびられた。記者は予が文相室に居る間、帽子をいじって見ての批判であるから、出鱈目でたらめをぬかしたはずはない。それともロンドンで如何様物いかさまを掴ませられたかと思ひ、三越に行き、こんな帽子を出せと言えばお生憎様あいにく、こんなお品はありません。又二年過てから、大阪の大丸で尋ねた、矢張り同様、こんな良いお品は日本では御需もとめに応ぜられますまいと、何れも御世辞いはずで無く、品質を良いとした。然らば先きの記者は、出放題をぬかしたのだ、帽子ならば後禍を孕まぬが、人事では油断ならぬ、買ひ被ぶられるのも嫌だが、見縊くびらるるはより甚しい。今後は随分注意せねばならぬと警戒した。近頃或る新聞記者に、此エピソードを話したところが「あいつは北海道生れで、帽子の好し悪しなんか判断する資格はありません、口から出まかせですよ、何も心配ありません」と言った。此事を明にせぬ前に、予は開学の日、評価一錢五厘の帽子を冠つて大阪入りをした。

大学の主体は教授である、教授其宜よろしきを得ざれば、学生の成績を昂上し、大学の品位を高むる能はない。若し大学に特色ありとすれば、そは教授研究の特色である。特色なき平凡の教授は歓迎されない。大学もまた平凡化するからである。試みに阪大理学部(註)に特色あらしめんとすれば、そは運動員と予が先に問答した如く、理工の間に位する鼠色の学科に重きを措くが、創立当時の精神に適合するを認めた。物理学と化学とで、其方面の人を物色して見れば、真島利行氏が染料研究を以て本邦の権威者であり、八木秀次(一八八六—一九七六年。一般的に八木アンテナ)

氏が、超短波を利用して通信を創試し、世界に名を知られている。其上大阪の旧家であつて、土地の氣風は習熟しているから、是非招聘して理学部に特色を付けたらと思つた。生憎両氏とも東北大学教授であれば、或は大学が離すを肯じないかも知らぬ。しかし個人の志望に対しては、大学も圧迫を加えぬから、試みに當つて見た。四月十日電波研究委員会で、天文台見学の帰途、電車内でちよつと八木氏に索りを入れてみたところ、慥に脈がある、喜んで来そうなあんばいだ、是は意外な獲物であつた。そうなると阪大に学問の花を咲かせること、恰も今日の桜花爛漫たるが如き日を待ち得べしと、雀躍、将来を祝福した。又真島氏に帝国学士院の会日に立談しをしたところが、引受けること間違なしと察した。此の如く主眼とした兩人が得心する上は、理学部を設置するに何の困難もない、他の教授は靡いて致すべしと、心竊に喜んだ。總長の心配せねばならぬ重要事項は、教授の任撰にあるが、主要なる位置を占むる教室主任が、雑作なく来意を示すに於ては、大難関は既に踏破した氣持がした。何んぞ自ら処するに怯にして、人を得るに勇なるとは、一般批評であつた。

是が開学以前の仕事であつた。形式上の開学は既に新聞に委しく記載してあれば、之を述ぶるは蛇足に属する。五月一日式を終え、翌日豫定の通り欧州行きの途に上つた。半年間の旅行中に得た總長の心得となるべき事項一二を記すれば、第一には経費の件である。ケンブリッジの副總長と会談したとき、大学で会計ほど面倒なものはない。又教授ほど会計に関し、没常識な意見を吐くものはないと曰われた。是は劍橋に限られた話ではなからう。世界到る所の大学で此弊習があると察せられる。教授は一本筋の学科に没頭していれば、よそ見を為すことは禁物である。其為め遂に唯我独尊に陥つて、他を顧みないから、調子外れの豫算を提出して、教授会で争う。之を旨く処理するが部長、總長の腕前を示す手品である。相手は小供ではない、口は達者であると来ては、易しく費用を按配する訳に行かず、下手をすると感情問題も抬頭せぬではない、されば争奪

の憂なからしむるには、特種の材能を要する。第二は總長の年齢である。我邦では、多くの場合に、帝大の總長に選挙せらるる人は、停年近くである。多年経験あり、徳望あり、事務に熟達した人に限られているから已むを得ない。總長になって、自分で学問研究に従事している者は僅かであるもまた已むを得ない。其処理する事務も、属官任せで済む件が多くを占めている。教授の本分である、授業と研究とから大分距離ある雑事に、明敏なる頭脳を消費するは、能率の揚らざるを証拠立てる。其故此の如き職掌を練習した人材を挙げて、總長となすが、国家的經濟なるを認むる。シカゴ大学は、アメリカ有数の大学であるが、三十一歳の總長を他大学から連れて来たそうだ。年にも似合わぬ敏腕家で、裁決流るるが如く、名總長と呼ばれている。日本にも此種類の人が生れるであろう。況んや總長病にまで罹る熱心家がある位だから、将来に於ては適材の總長を得る時期が来るであろう。頽齡(おいぼれ)(た年齢)に近い人間を、必しも駆り出して、慣れざる職務に従事せしむる愚をなさんでも済むだろう。予が總長になったのは、少く時代錯誤の気味がある。又恐らく世人は總長を餘り重要視している結果かとも思われる、不可思議でかなわぬ。

開学以来阪大の施設其他は順調に進んだ。其間の過程は表題外に属するから記述せぬ。昭和九(一九三四)年六月には理学部の建築も略落成し、予の為には廃業の好機会であった。是で一段落を付けて、豫定の行動に入らんとする矢先き、予は腎石を患い、数旬の間病床に呻吟する憂目に逢ったので、辞表を提出するに旨い口実ができた。三年間も此職に居ようとは豫定しなかつたが、荏苒(じんぜん)(のびのび)(になり)三星霜(三年)を経過した。幸に理学部の開学を終つて辞表は聴許せられ、六月下旬大阪を引払つて、元の巢に帰つて安堵した。帰るに臨み、大阪有志者に対して總長たりし間の好遇を謝すると共に、将来大阪市の警戒すべきは水害にあることを注意了。果して丁度二ヶ月目に風水害(一九三四年九月二日、大阪を襲つた台風による高潮で大阪市の一部と近郊が被害をうけた)があつたけれども大学には瑣細の被害あつたのみで、

勿怪もつげの幸であつた。而しかうして始めは總長就業に就き駄々を捏こねたが、三年間世話をしてみると、何やら懐かしくなつて、閑があれば大阪に出掛け、大学の発展を觀察して樂たのしんでいる。想おもうに帝大創立の効果が現あらわつるのは、十年後にあるであらう。工業会社に投資して、翌年から配当を為すように、旨うまく教育事業に成果を挙げ得ぬのは遺憾である。

筆を擱おくにあたり、悵然ちやうぜん故濱尾子〔爵〕を偲しのぶを禁じ得ない。若もし東北大学の懸案中、濱尾子〔爵〕が予に總長嫌疑液を注射しなかつたならば、予は今日生きた化石となつて、生けるも死せるに均ひとしいであらう。及およばずながら今なお学問界に命脈を保つを得たるは、全く濱尾子〔爵〕の与えた功德である。又同時に、大阪市民が予を優待せられたるに対し、深甚なる感謝の意を表せねばならぬ。

〔『文藝春秋』昭和十一（一九三六）年九・十月号所載〕

- 『随筆』（一九三六年十一月、改造社）所載
- 旧字は新字改めたが、一部旧字のままとした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために割注を附した。
- カタカナの地名・人名などは、通行の表記にした。
- PDF化にはL^AT_EX 2_εでタイプセッティングを行い、dvi_{ps}dfxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。